

オオメシマコブの絶滅危機



文と写真●服部 力 Hattori Tsutomu

研究ディレクター

オガサワラグワの枯れ木に生えた
オオメシマコブ

生きた大木にも寄生して心材(幹の中心の材)を腐らせるが、それが原因で木が枯れたり弱ったりすることはない。

オオメシマコブは「サルノコシカケ」と俗称される硬質きのこの一種です。熱帯地方を中心に広く分布し、国内では小笠原諸島と高知県に離れて分布すると考えられてきました。ところが、DNAや形態的な特徴などを詳しく比較したところ、小笠原諸島と高知県に分布するものは別種であること、さらには海外に分布する種類とも異なる新種であることがわかりました。

もともと「オオメシマコブ」は小笠原に分布するものに対して付けられた名前でした。ですので、和名としては、小笠原産のものが狭義のオオメシマコブということになります。このオオメシマコブは、世界中で小笠原諸島にしか分布していないきのこです。そして、オガサワラグワという木にしか生えないことがわかっています。オガサワラグワも小笠原諸島だけに天然分布する樹木で、元々は島内の湿潤な地域に広く分布していたようです。

ところが、オガサワラグワは建材や家具などとして重用されたことから、明治期以降大量に伐採されてしまいました。加えて、薪として使うために本来小笠原諸島に分布していなかったアカギという木が沖縄から持ち込まれました。繁殖力の強いアカギは、小笠原諸島のあちこちこちらで爆発的に増えてしまっています。

そのため、オガサワラグワをはじめとする原生樹の多くが、アカギに追いやられてしまったのです。いまでは、オガサワラグワは絶滅の危険性が高い絶滅危惧種に指定されています。オガサワラグワの大木が数少なくなった今、オオメシマコブも絶滅の危機に瀕しています。♣

オオメシマコブが発生した
オガサワラグワの古い切り株

中央部が腐って空洞になっている。心材を腐らせたオオメシマコブが、伐採後も切り株の中で長年にわたり生きながらえてきたことをうかがわせる。



アカギの林

見わたす限りの高木がほとんどアカギになってしまっている。
(小笠原諸島)

撮影は筆者(『森林と菌類』 共出版より)